

出石旧城下町の歴史的災害による 罹災範囲の復元的考察

A Reconstructive Consideration of Areas Damaged by Historical
Disasters in Izushi, Old Castle Town

吉川奎¹・青柳憲昌²
Kei Yoshikawa and Norimasa Aoyagi

¹ 立命館大学大学院 理工学研究科環境都市専攻 博士課程前期課程 (〒525-8577 滋賀県草津市野路東 1-1-1)
Graduate Student, Ritsumaikan University, Graduate School of Science and Engineering

² 立命館大学准教授 理工学部建築都市デザイン学科 (〒525-8577 滋賀県草津市野路東 1-1-1)
Associate Professor, Ritsumeikan University, Dept. of Architecture and Urban Design

In this paper, the history of disasters in the early modern period of Izushi and the restoration of the damaged area are examined based on the local history literature. The research area, Izushi Town, Hyogo Prefecture, prospered as a castle town in that period, and has been recognized as having great traditional importance building group because it still retains its appearance. This paper considers the damage caused by past disasters based on the descriptions in the literature, and the mechanism of flooding of the Taniyama River and taking into account examining the extent of damage caused by fires in 1876 and 1823, and floods in 1722 and 1850. As a result, the area affected by the fires of 1876 and 1823 was reconstructed. This paper confirms that the fire of 1876 was a large-scale fire that covered the entire old castle town, but there is a high possibility that some areas escaped the fire. Furthermore, the damage caused by the floods of 1722 and 1850 was analyzed and shows that the flood flowed through Zaimoku-machi and Iki-machi, into Uchi-machi and the inner moat, and overflowed from the west end of the inner moat into Tainosho-machi.

Keywords: *Izushi, Historical Disaster, Great Fire, Flood Disaster*

1. 序

兵庫県豊岡市出石旧城下町(図1・2)の近世・近代の災害履歴については、『出石町史』(出石町史編纂委員会編、1984)に記されているが、それぞれの罹災範囲や原因については詳しく分析されていない(表1・2)。そこで本研究は、出石に発生した過去の火災・水害の罹災範囲についての復元的考察を行ったものである。本稿は、過去の災害の被害状況を文献の記述をもとに見直しつつ、近世絵図に描かれた町割りとともにそれを詳細に比較・検討することにより、罹災した範囲を推定することが不可能ではないことを示したものであり、これまで試みられることのなかった罹災範囲を推定する方法論の提案でもある^{注1)}。とりわけ火災の罹災範囲を特定することは、過去の火災で焼け残った文化的・歴史的価値の高い建物を今後発見し、それらを適正に価値付けることにも繋がるし、水害については今後の防災まちづくりの一助ともなりえる。昭和8(1933)年の谷山川砂防工事によって、町内を蛇行していた谷山川が町の南側を抜けるようになり、さらに平成6(1994)年には町の東部から山間部を通して出石川に抜ける放水路が建設された。したがって、近世の状況は現状とは同じではないが、昨今の豪雨を鑑みて放水路が機能不全に陥ることもあり得るから、そのことを勘案すれば、近世の状況を検討することには現代的な意味があると考えられる。

本稿で用いた資料としては、まず文献資料として『出石町史』(前掲)、『御用部屋日記』(出石町役場総務課町史編集室編、1982)、『仙石家譜』(『出石町史』所収)があげられる。また、近世の町割りや土地利用状況がわかるものとして文化7(1810)年の「出石城下町絵図」(豊岡市歴史博物館蔵、以下「文化絵図」とする)がある。さらに、その他の近世絵図類や地方史等の文献も併せて用いた。本稿は、それらの資料を用いて、明治9(1876)年・文政6(1823)年の火災、享保7(1722)年・嘉永3(1850)年の水害の罹災範囲の復元的考察を行いつつ、谷山川の氾濫の仕組みについて考察したものである(上記の災害に着目した理由は主に資料上の制約による)。

表 1. 出石町の近世・近代の火災史（被害状況が判明する主なもの）

年	出火元	被害状況	文献
1816（文化13）	下魚屋町鍛冶宇兵衛の職場	周りわずかに延焼	出石町史
1823（文政6）	裏町民家小林屋	鉄砲町一帯に延焼、焼失家屋鉄砲町28軒、裏町65軒、川原町165軒、田結庄町11軒	御用部屋日記
1838（天保9）	新町小頭銀兵衛町人良介居宅	延焼、20軒焼失	御用部屋日記
1866（慶応2）	小御料庄町	延焼、焼失家屋68軒	御用部屋日記 仙石家譜
1876（明治9）	入佐町の一角	全焼戸数966軒、半焼戸数5軒、全焼社寺39軒、全焼土蔵290軒、全焼部屋186軒	校補但馬考

※『出石町史』（出石町史編纂委員会編、1984）、『仙石家譜』（『出石町史 第一巻』所収）、『御用部屋日記』（出石町役場総務課町史編集室編、1982）、『校補但馬考』（桜井勉、1922）をもとにまとめたものである。

※「被害状況」欄の被害数の単位はいずれも原文からの引用である。

表 2. 出石町の近世・近代の水害史（被害状況が判明する主なもの）

年	被害状況	出典文書
1722（享保7）	侍屋敷破損45軒、同半潰8軒、町家破損60軒、同潰家10軒、流家6軒、在々潰家35軒、同流家16軒	仙石家譜
1746（延享3）	潰家196軒、破損家189軒、堂社28宇、制札所17箇所	仙石家譜
1748（延享5）	出石城三の丸石垣1箇所3間余崩れ	仙石家譜
1748（延享5）	潰家175軒、半潰家106軒	仙石家譜
1749（寛延2）	流家178軒、潰家211軒	仙石家譜
1750（寛延3）	流家11軒、潰家43軒	仙石家譜
1755（宝暦5）	潰家70軒、破損家68軒	仙石家譜
1756（宝暦6）	潰家4軒	仙石家譜
1762（宝暦12）	潰家流家28軒	仙石家譜
1808（文化5）	流家潰家70軒	仙石家譜
1816（文化13）	大橋下増水6～9尺余。侍屋敷所々に浸水、破損多し在町水入流家崩家47軒	仙石家譜
1850（嘉永3）	大川増水6尺、大橋下9尺3、4寸。城下家屋に浸水、八木町・田結庄町・鉄砲町辺りが床上浸水、松枝区一帯の床上浸水は想像に難くない	仙石家譜 御用部屋日記
1871（明治4）	高福寺流失	御用部屋日記
1890（明治23）	馬場上の石堤決壊し家屋流失す	校補但馬考
1892（明治26）	出石郡家屋浸水36戸、橋流失1	兵庫県災害誌
1896（明治29）	堤防決壊・小野小学校大破・村役場山崩れのため倒壊、谷山川堤防決壊・20か所橋梁ごとごとく皆流失	出石町会会議録
1907（明治40）	出石川氾濫最高水位8尺。出石町全戸浸水	兵庫県災害誌
1912（大正1）	松枝・七軒町・川原・柳町・小人全部浸水、田結庄・本町・八木一部浸水	出石町会会議録
1918（大正7）	浸水家屋341戸、堤防決壊12、松枝・川原・田結庄等浸水	出石町事務報告
1921（大正10）	明治29年以來の大洪水、谷山・下谷以外はほとんど全部家屋浸水	出石町事務報告
1922（大正11）	浸水家屋305戸	出石町事務報告
1930（昭和5）	町分ほとんど全部にわたり浸水被害、魚屋・鉄砲において住宅各一流失 浸水戸数678戸、倒壊被害あり	出石町事務報告

※『出石町史』（出石町史編纂委員会編、1984）、『仙石家譜』（『出石町史 第一巻』所収）、『御用部屋日記』（出石町役場総務課町史編集室編、1982）、『校補但馬考』（桜井勉、1922）、『出石町会会議録』（『出石町史 第二巻』所収）、『出石町事務報告』（『出石町史 第二巻』所収）をもとにまとめたものである。

※「被害状況」欄の被害数の単位はいずれも原文からの引用である。



凡例 [---] : 伝統的建造物群保存地区

図 1. 現在の出石旧城下町
（出典：出石振興局提供図）

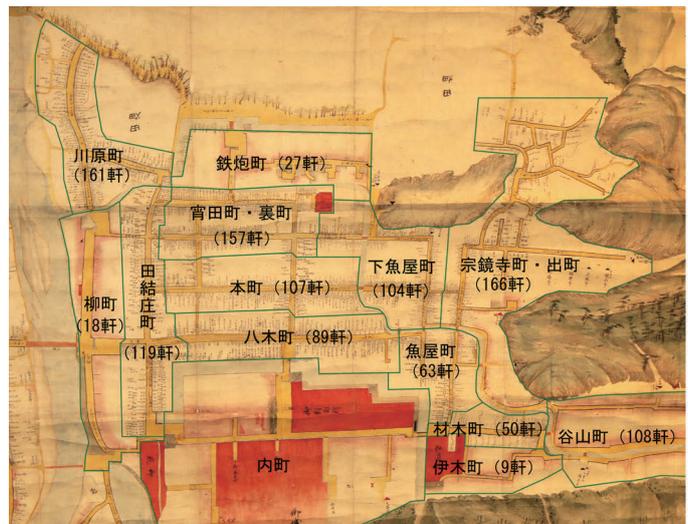


図 2. 文化7年「出石城下町絵図」と各町の筆数（戸数）
（出典：豊岡市歴史博物館蔵）
※町名は同絵図に表記されている地名

2. 過去の火災の焼失範囲

(1) 明治9年(1876)の出石大火

a) 既往文献における罹災状況

明治9年3月26日の夕刻に発生した火災は、出石旧城下町の大半を焼失させた大規模な火災であり、近代出石の出発点ともなったという点で重要である。『出石町史 第二巻』(p.168)には「入佐町の一角に発した火が、折から強風に煽られて連たんする人家を襲い、瞬間に大川以東の市街を焼き尽くしてしまったのである」と記されている。「入佐町」は旧城下町南東部に位置する町である。被害状況は『校補但馬考』(桜井勉、1922、p.225)によれば、「全焼戸数九百六十六、半焼戸数五、全焼社寺三十九、全焼土蔵二百九十、全焼部屋百八十六、全焼物置等九十七、焼死人五、負傷人十四」とある。出火地点に関しては『出石町史第二巻』(前掲)に「岩鼻に独居する旧藩卒が(中略)火の後始末を怠っていたところへ強風が吹き込んだ」という記述と、『校補但馬考』(前掲)に「出石町字岩鼻に住せる森谷徳平なるもの、酔酩し火を失し」という記述がある。「岩鼻」という地名は、現在は確認されないが、現入佐町南西部に「岩鼻稲荷神社」があり、火元はおそらくこの神社周辺であろう。出火地点の正確な位置はわからないが、『出石町史 第一巻』(p.855)にも、現入佐町は明治初期までに「岩鼻を改称した町名である」と記されているので、やはり岩鼻神社の周辺と言ってもよいだろう^{注2)}。また、城下町南西部に位置する「小人町が風向きの関係で災厄を免れた」(『出石町史 第二巻』p.169)とあり、出火地点が町の南東部にあることから、火災時の風向きは南東からの風であったと考えられる。

表3は、『伝統的建造物群保存地区保存対策調査報告書(出石城下町地区)』(出石町教育委員会、2001)、『寺院明細帳』(『出石町史 第四巻』所収)

表3. 出石大火被害記録

番号	建物名	地区	延焼	内容	文献
1	願成寺山門	東條	×	文化元年(1804)棟札	①
2	宗鏡寺本堂	東條	×	天保13年(1842)再造棟札	①
3	経王寺本堂	谷山	×	天保15年(1844)棟札	①
4	昌念寺	魚屋	○	「明治九年火災ノ節類焼」	②
5	本高寺	魚屋	○	明治9年の出石大火で被災	①
6	中村邸	田結庄	○	「明治十年」の棟札、大火後再建	①
7	旧丹波屋	田結庄	○	大火後明治10年再建	①
8	上田邸	田結庄	○	大火後に久美浜の旅館を移築	①
9	角岡邸	田結庄	×	嘉永7年(1854)の棟札	③
10	小畑邸	田結庄	×	弘化4年、嘉永元年(1847)の棟札	③
11	家老屋敷	内町	×	大火で残った貴重な遺構	①
12	辰鼓楼	内町	×	明治4年の墨書あり	①
13	諸杉神社	内町	○	本殿、御輿庫、祝詞舎など類焼	①
14	弘道館	材木	○	跡地建設の小学校大火にて焼失	①

※1 文献欄の番号は下記である。①『伝統的建造物群保存地区保存対策調査報告書(出石城下町地区)』(出石町教育委員会、2001) ②『寺院明細帳』(出石郡役所、『出石町史第四巻』所収) ③豊岡市出石振興局提供資料

※2 「延焼」欄の「○」は罹災したもの、「×」は罹災を逃れたものである。

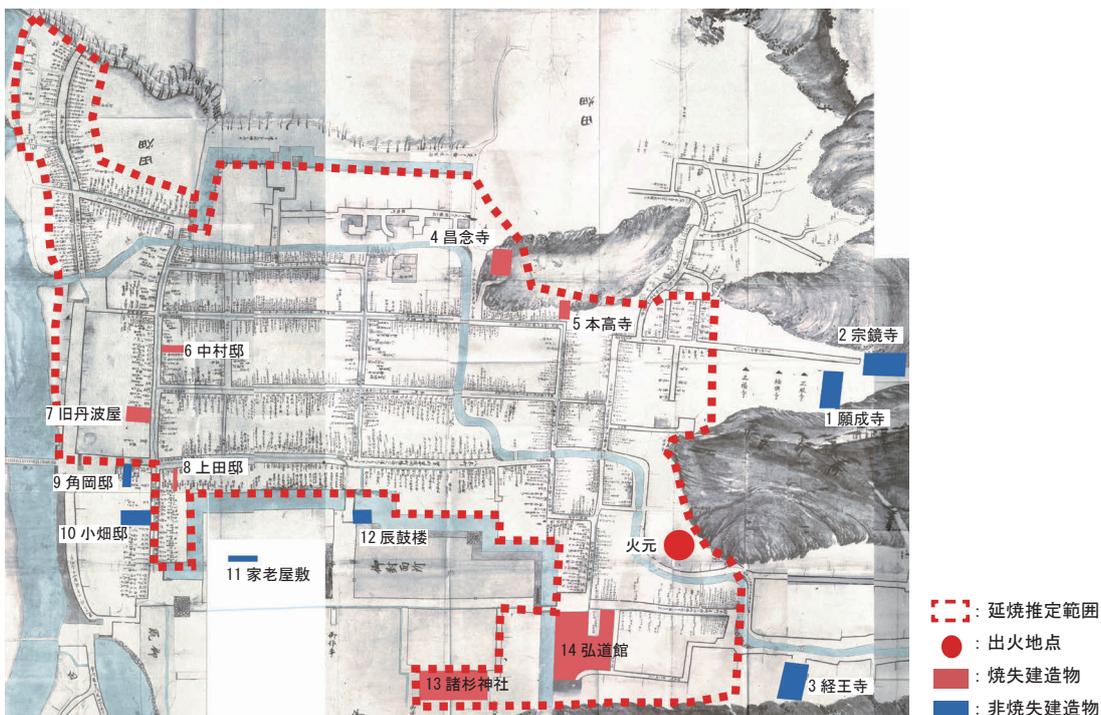


図3. 明治9年出石大火罹災範囲推定図

※ 図中番号は表3に対応(下図:文化7年「出石城下町絵図」)

などを用いて、明治9年大火の記述がある建物をまとめたものである。罹災範囲はこれらの建物のうち、この火災で燃えなかったとされるものを結ぶ範囲よりも内側であったと推測できる（図3）。

b) 文化7年絵図にもとづく罹災範囲の推定

以下では、諸種の文献の記述を参照しつつ、文化絵図を用いて明治9年大火の罹災範囲を复原する（図3）。文化7（1810）年の文化絵図と明治9（1876）年の出石大火の年代差はおよそ70年あるが、以下では、そのことを勘案しつつも、文献上の「全焼戸数966」がどれほどの範囲に及ぶのかを、文化絵図に描写された筆数と対応させながら推定する。ここで、文化絵図に描かれた総筆数を数えると1,178筆となり、出石旧城下町の大半を焼き尽くしたとされるこの大火の全焼戸数が966戸であったことを併せて考えると、この戸数は棟数ではなく筆数と同等のものと考えるのが妥当である。

まず、町の東部にある願成寺山門・宗鏡寺本堂・経王寺本堂（図3）には、大火以前の棟札が残っている（表3）^{注3}）（表3）、これら寺院は罹災しなかったと判断される。一方、城下町の北部については、『寺院明細帳』によれば、昌念寺は「明治九年火災ノ節類焼」と記され^{注4}）、伝建調査報告書によれば、その付近にある本高寺は「明治9年の出石大火で被災」したとされる^{注5}）。つまり、北部のこれら2寺はこの大火で被害を受けており、南東から吹く風向きの影響を考慮すると北部はほぼ全域にわたって延焼したと判断される。

城下町の西部については、北西の隣村である水上村の「一部を焼き払い」と記されているから^{注6}）、城下町西の川原町はほとんど全焼したと判断される。城下町西南部の田結庄町の町家3棟は大火後の建物と判明しているが、同町南部の一角には江戸期の棟札が残る町家が2棟（図3・表3の9・10）確認されており、風向きを考慮すると、この区画は延焼を免れた可能性が高い。

城下町の南部については、内町の諸杉神社本殿などが焼失している。一方、家老屋敷と辰鼓楼は大火以前から存在する建物であり、被災した記録はない。当時は内町に内堀が巡らされており、弘道館を伝って飛び火した諸杉神社以外は被災しなかったと思われる。なお、内堀は現在辰鼓楼の東に一部を残すのみであるが、近世では内町を囲うように巡らされていた。現在も残る部分から推測すると、約10mの幅の堀が巡っていたと考えられ、その防火有効性は十分にあったと思われる。

城下町東部については、材木町の東にある経王寺本堂に天保期の棟札が残り、被災していない（表3）。出火地点付近の屋敷群は谷山町側の屋敷群と幅広い道で隔てられており、南東からの風向きを考えると、おそらく谷山町にはほとんど延焼しなかったものと判断される。

以上より、町全域にわたって罹災した町ごとの戸数を文化絵図にもとづき合計すると、川原町161戸・鉄砲町27戸・宵田町157戸・本町107戸・八木町89戸・下魚屋町104戸・魚屋町63戸・材木町50戸・伊木町9戸となり、合計767戸となる。記録に残る全焼戸数は966戸なので、残る199戸の罹災範囲を検討する必要がある。

前述のように、田結庄町南部には江戸期の町家が残っているの、南東からの風であったことを考慮しつ

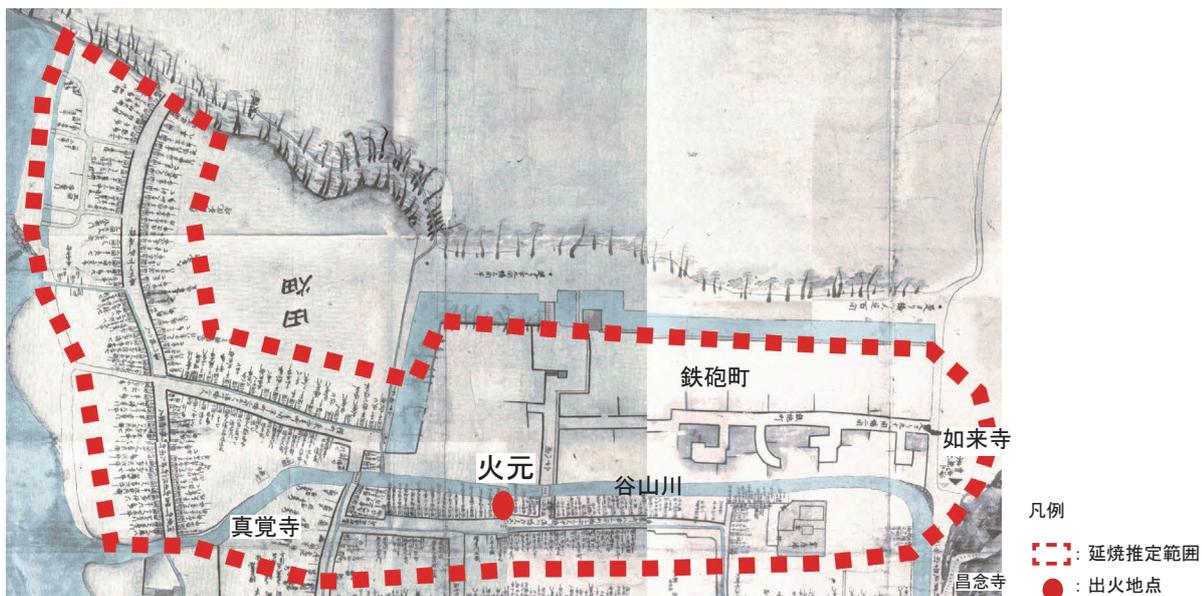


図4. 文政6年裏町大火罹災範囲推定図
（下図：文化7年「出石城下町絵図」）

つ、それらの町家を外すように焼失範囲を設定すると（図3）、田結庄町・柳町で合計106戸が罹災したことになる。一方、東部の宗鏡寺町に関しては不明な点が多いが、宗鏡寺参道の入口付近まで町家が連なっていたため、その付近を延焼範囲境界線に設定すると90戸となる。上記の範囲に含まれる軒数を数えると合計963戸となり、史料に残る全焼戸数966という被害状況とおおよ数が合う。

上記のように推定した罹災範囲は、もとより資料上の限界から厳密な精度は求め得ないものではあるが、文献と絵図を合わせて考察することにより、これまで示されたことのなかったこの大火のおよその焼失範囲を推定できたという点で一定の意義があると考えられる。そして、明治9年大火は従来指摘されているように旧城下町全域にわたる大規模火災であったことを確認できたが、一部の地域では火災を免れた可能性が高い。現在の伝統的建造物群保存地区の範囲（図1）と照らし合わせれば、田結庄町・柳町の南部、および内町の大部分がそれであり、今後この地区の調査を重点的に行うことで江戸期に遡る建物が発見される可能性もある。

(2) 文政6年（1823）の裏町大火

文政6年の裏町大火については『御用部屋日記』（『出石町史 第三巻』所収、p.519）に記述がある。まず、「鉄砲町橋より四、五軒西之方裏町町家方出火」という記述より、出火地点が特定できる（図4）。同資料に「折柄南風強節」とあるように、強い南風を受けて谷山川を越えて延焼したようである。「裏町ハ左右江火移り、鉄砲町屋敷、御長屋不残、如来寺焼失、既ニ昌念寺も危処」とあり、裏町は火元を中心に東西へ延焼し、鉄砲町は屋敷・長屋を残らず焼失させ、東部において如来寺を焼失させたが、昌念寺は危ないところで焼失を免れたと読み取れる。

西方については「裏町不残、田結庄町下西側ハ真覚寺下隣方、東側者裏町上角方下不残、川原町堅・横不残焼失」という記述から、鉄砲町・川原町は残らず焼失し、田結庄町と裏町は部分的に延焼したとわかり、真覚寺南隣の敷地で焼け止まったとわかる。なお、後述のように、引用文中の「上・下」は「北・南」を意味していると考えられる（3章（2））。被害状況は「焼失家屋鉄砲町28軒、裏町65軒、川原町165軒、田結庄町11軒」である。ほぼ同年代に作成された文化絵図をみると、各町の戸数は鉄砲町27戸・裏町70戸・川原町161戸・田結庄町11戸となり、いずれの町の戸数も、文献上の記録と数戸以内の差に収まっている。このことは文化絵図に示された戸数の妥当性を示すものでもある。

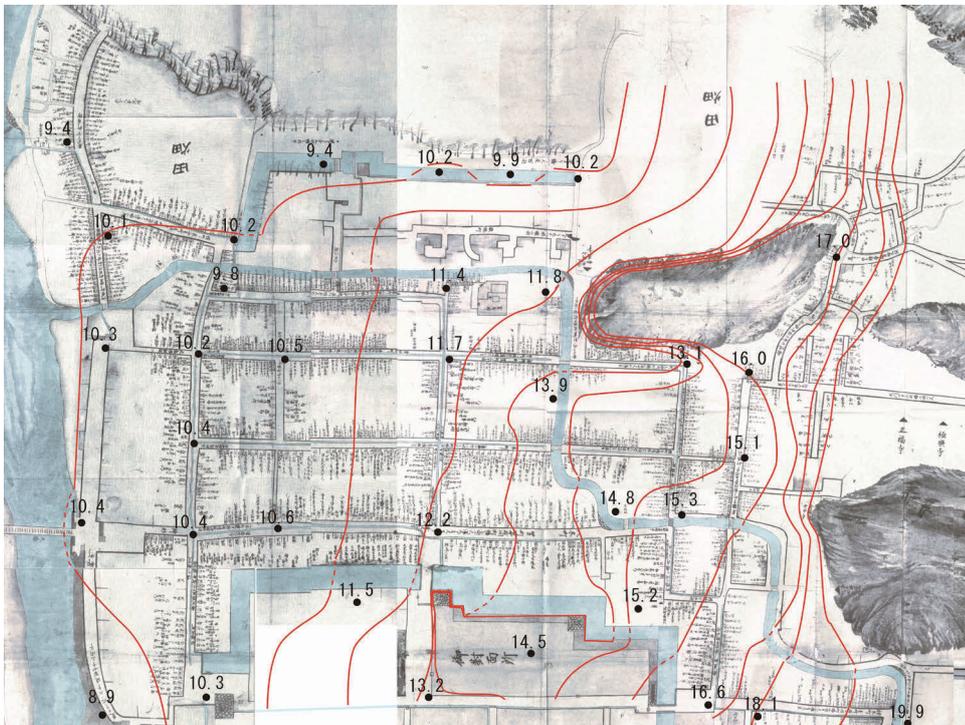


図5. 出石町 標高分布図 ※ 図中の数字は標高（m）
 ※ 本図は豊岡市作成の防災ハザードマップ（豊岡市公式ウェブサイト）に表記されている各地点の標高を「文化絵図」にプロットして等高線を作成したものである。

3. 近世の水害の罹災範囲と原因

以下では、出石旧城下町で過去に発生した水害のうち、詳細な記述が残る享保7（1722）年と嘉永3（1850）年の水害を取り上げ、文化絵図を用いつつ罹災範囲を検証する。図5は豊岡市作成の防災ハザードマップ^{注7)}に表記されている各地点の標高を「文化絵図」にプロットして等高線を作成したものである^{注8)}。以下ではこの図を用いつつ水害を引き起こした原因についても考察を加える。

(1) 享保7年（1722）の水害

享保7年の水害について『仙石家譜』（『出石町史 第一巻』所収、p.607）に次のように記されている。

朝より雨降続二十四日終日降続夕に至て一丈許り増水、①楊枝谷より谷山川急に満水、②杉原主人が宅脇の堀より伊木町・材木町に水押し東堀に流れ入り、③東門土橋押切れ内町岩波半右衛門が宅前まで押崩し、④大手門土橋をも押崩し、大手西の角石垣其外土居石垣所々破損、夕七ツ時過⑤山里曲輪より水押し山里門危うく、城下町郡中に至て水破夥し。⑥侍屋敷破損四十五軒、同半壊八軒、町家破損六十軒、同潰家十軒、流家六軒

記述①より、出石町東にある楊枝谷より谷山川が増水し、記述②より、伊木町東部にあった杉原主人宅の脇から伊木町・材木町に浸水したことが読み取れる（図6）。そして、記述③より、町に溢れた水が内堀の東門に達し、東門の土橋が崩れ、内町にあったと考えられる岩波宅の前まで浸水したことがわかる。橋を押し倒したとあるので土石流も含まれていたのかもしれない。記述④より、大手門土橋を崩したとされているので、内堀には多くの水が急激に流れ込んだことが読み取れる。ここで、図4に示した地形の高低差を考え合わせれば、材木町で溢れた水が内町に流れ込むのは自然である。なお、記述⑤より、内町にある山里門まで水が達したとされ、出石城の南の山から水が流れ込んだのかもしれない。また、「城下町郡中に至て水破夥し」とあるが、記述⑥に示された被害状況を見ると、被災した町家は「76軒」とされる。文化絵図に描かれた材木町の総戸数は50戸であるから、この水害の罹災範囲は図6で示した範囲を大きく超えることはないと考えられる。

(2) 嘉永3年（1850）の水害

次に嘉永3年の水害については『出石町史 第三巻』（pp.615-616）^{注9)}に次のように記されている。

今日之風雨、谷山川筋殊外出水、右故哉水勢烈 ■■■ 川筋・往来一面之水与相成、①欄干橋上服部鳥之助門前、下岩鼻往来、宗鏡寺町丁字屋辺迄一面川原二相成り、却而元川筋ハ石砂に而埋り実ニ前代未聞之事、岩鼻浅井六郎右衛門門并内庭之分流レ、心光院橋流レ宗鏡寺町石橋中程落、②就中欄干橋辺之水材木町へ溢レ、東御門之方へ突当殊ニ御城山之水烈しく上ハ堀一面之出水、右故哉③東御門前切レ其水内町へ流れ込、并大手御堀の水強く左右之駒寄セ倒れ、田結庄町上へ流れ込、同町家不残床へ上り、④八木町上田吉郎右衛門宅辺迄も床へ上^(り方)■■■、本町下なども床へ上り、⑤鉄砲町辺なども強く折原■■■石砂入、金沢宅など水床へ上り、昌念寺御廟の辺余程欠ケ、其辺大木三本根こそぎニ相成、



図6. 享保7年の水害範囲推定図（下図：文化7年「出石城下町絵図」）

凡例 ■■■■：水害推定範囲

如来寺善光寺前松根こそぎニ倒レ、其外数ヶ所大破候（※ ■は原文の伏字を示す）

記述①より、文化絵図の宗鏡寺町南端部に記された「丁字屋」の位置を勘案すると、岩鼻から魚屋町辺まで氾濫した水により浸水被害があったことが読み取れる（図7）。「宗鏡寺町丁字屋辺迄」（傍点引用者）とあるから、丁字屋より上流側の被害が甚大で、それより下流側の旧城下町中心部の被害は比較的少なかったと考えられる。実際、町中心部の被害が大きければ当然資料にそのことが記されると思われるが、それについて何も記されていない。

一方、記述②より、前記の享保7年水害と同様、材木町・伊木町に溢れた水が東門に達し、そこで切れて町に水が溢れたとわかり、また、出石城南の山からも水が流れ込んできたこともわかる。そして、記述③から、内堀に流れ込んだ水が堀を伝って大手門周辺を破損させ、さらに西へ進んで田結庄町に溢れたとわかる。田結庄町の町家は「不残床へ上り」、つまり全ての町家が床上浸水したとされる。地形高低差（図5）を見ると、田結庄町は北に向かって下がっているの、町の南の内堀で溢れた水が北へ向かって流れ込むのは自然であ

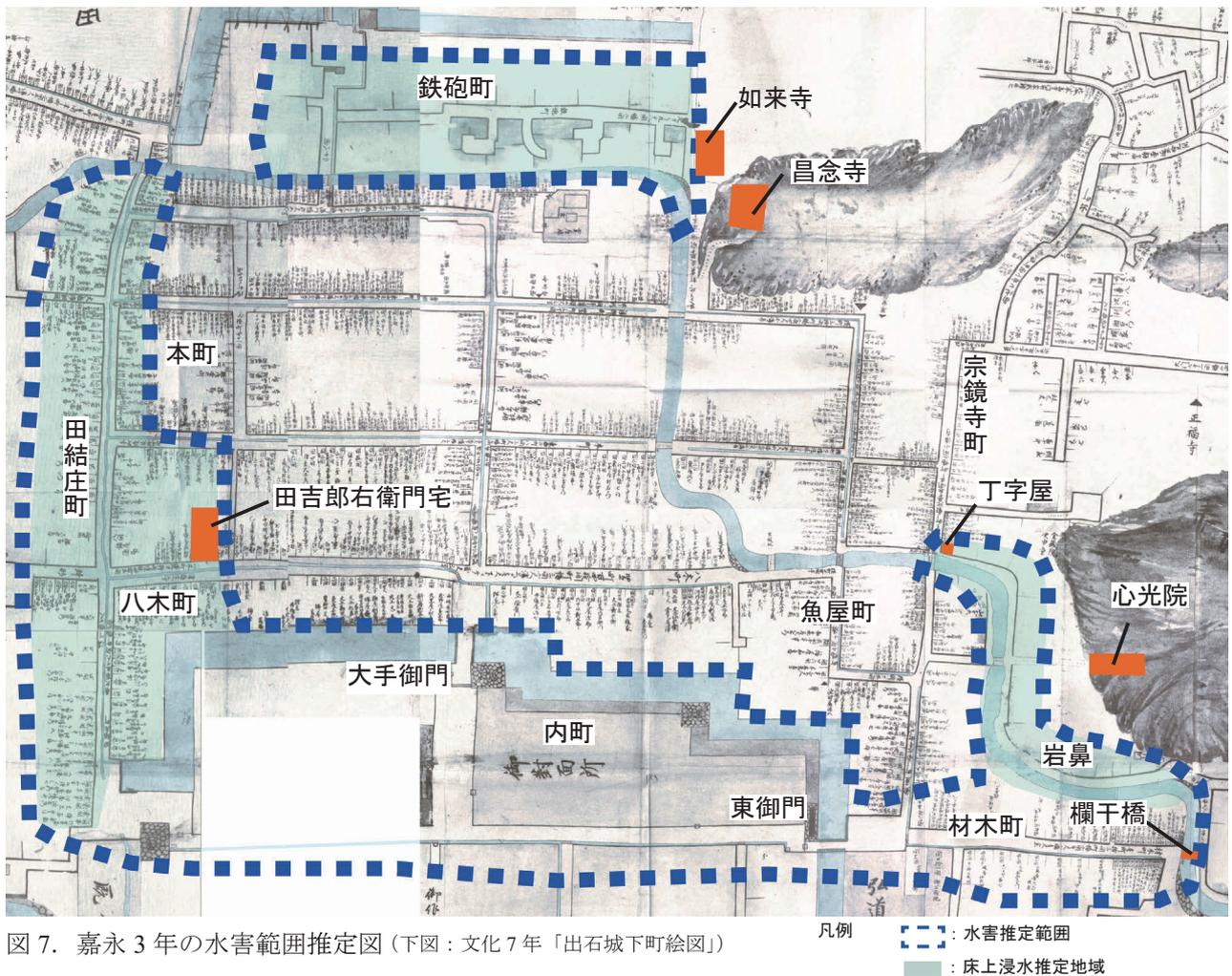


図7. 嘉永3年の水害範囲推定図（下図：文化7年「出石城下町絵図」）

凡例 ■■■：水害推定範囲
■■■：床上浸水推定地域

表4. 近世以降の水害の各町の被害状況

水害発生年	田結庄	内町	八木	本町	宵田	鉄砲	魚屋	伊木	材木	入佐	東條	谷山	小人	柳	松枝	川原	文献
1722(享保7)		○						○	○								①
1850(嘉永3)	○	○	○			○			○	○	○						②
1912(大正1)	△		△	△									○	○	○	○	③
1918(大正7)	○														○	○	④

※ ○は水害による被害があったとされる町。△は「一部浸水」と記載のあった町である。

※ 「文献」欄の番号は以下の通りである。①『仙石家譜』（『出石町史 第一巻』所収）②『出石町史 第三巻』（原書不明）③『出石町会会議録』（『出石町史 第二巻』所収）④『出石町事務報告』（『出石町史 第二巻』所収）

る。記述④について「八木町上田吉郎右衛門宅辺迄も床へ上」とあるが、文化絵図をみると八木町北に「米屋田吉郎右衛門」の土地を確認でき、八木町はこの家付近まで浸水被害があったと考えられる。八木町におけるこの家の位置をみると、文中の「上」は「北」を意味しているとわかる。さらに「本町下なども床へ上り」とあり、本町も、この「米屋田吉郎右衛門」の家と同じ土地の高さまで浸水したことがうかがえる。さらに、記述⑤より鉄炮町東部にある如来寺・昌念寺が被害を受けていることから、谷山川が屈曲するところで水が溢れ、土地の高低差に応じて鉄炮町西側へと浸水被害が進んだものと思われる。

(3) 近世の出石旧城下町の水害の仕組み^{メカニズム}

以上2つの水害を踏まえて、近世の出石旧城下町の水害の仕組みを推測すると、谷山川の材木町東端で氾濫した水が土地の低い内町方向に流れ込み、内堀を介して田結庄町全域および本町西部を浸水させることがよくあったと考えられる。表4は、文献より近世以降の町ごとの被害状況がわかる水害記録をまとめたものである。出石は水害が多いとはいえ、記録上どの町が浸水したかが確認できるものはあまり多くないが、田結庄町・内町・八木町・材木町・松枝町・川原町の各町は、少なくとも2回以上の水害をうけている。標高10m前後の田結庄町・松枝町・川原町は城下町でも低い土地にあり、現代においてもこれらの町は浸水危険区域であることが指摘されている^{注10)}。

4. 結論

本稿では以下のことを明らかにした。まず、出石旧城下町の火災について、明治9年の大火、文政3年の裏町大火による罹災範囲を復原した。その結果、明治9年大火は従来指摘されているように旧城下町全域にわたる大規模火災であったことを確認できたが、一部の地域では火災を免れた可能性が高い。現在の伝統的建造物群保存地区の範囲と照らし合わせれば、田結庄町・柳町の南部、および内町の大部分がそれであり、今後この地区の調査を重点的に行うことで江戸期に遡る建物が発見される可能性もある。また、水害についても、享保7年と嘉永3年の水害の被害範囲を復原し、氾濫した水が材木町・伊木町を通して、内町・内堀に流れ込み、内堀西端から田結庄町へと溢れるという出石の水害の仕組み^{メカニズム}を明らかにした。

謝辞：本稿作成に際しては、豊岡市出石振興局の田口雅敏氏・紙谷竜馬氏、豊岡市歴史博物館の小寺誠氏の多大なご協力を賜った。ここに謝意を表したい。

注釈

- 注1) 本研究のテーマに関する既往研究としては、長尾泰源・谷端郷・麻生将「火災図を用いた『元治の京都大火』被災範囲の復原」(『歴史都市防災論文集』Vol.6, 2012.)や、塚本章宏・中村琢巳「歴史的建造物の被災履歴と火災図を統合した『天明の京都大火』被災範囲の復原」(『歴史都市防災論文集』Vol.5, 2011.)などがあげられる。いずれも罹災範囲の大枠を示す火災図を用いて罹災範囲を推定するものであるが、本研究は当時の罹災範囲がうかがえる絵図資料がないという条件下で、近世の地割りを示す絵図と罹災した家屋件数を対応させて、火元・風向き・地形などを加味しつつ考察することにより、およその罹災範囲を示したところが既往研究とは異なっている。
- 注2) なお、「出石町内大字・小字一覧」(『出石町史 第四巻』p.743)をみると、大字「谷山」の中に小字「岩鼻」が記載されているが、その位置は現在の谷山集落東の山中であるから、そこが火元であったという可能性は考えられない。
- 注3) 『伝統的建造物群保存地区保存対策調査報告書(出石城下町地区)』出石町教育委員会, p.170, p.172, p.177, 2001.
- 注4) 『寺院明細帳』出石郡役所、『出石町史 第四巻』所収, p.557, 1993.
- 注5) 『伝統的建造物群保存地区保存対策調査報告書(出石城下町地区)』出石町教育委員会, p.175, 2001.
- 注6) 『出石町史 第二巻』、出石町史編纂委員会編, p.168, 1991.
- 注7) 豊岡市公式ウェブサイト <https://www.city.toyooka.lg.jp/bosai/bosai/bosaimap/index.html>
- 注8) なお、本文に掲載した「標高分布図」の等高線の作成に際しては、「谷 謙二(2015) 標高タイルを利用した等高線作成 Web サイト『Web 等高線メーカー』の開発とそのアルゴリズム、埼玉大学教育学部地理学研究報告, 35, 73-83.」を一部参考にしてている。
- 注9) 『出石町史 第三巻』の当該箇所には出典が明記されていないので、原書は不明である。
- 注10) 豊岡市が作成した防災マップ(豊岡市公式ウェブサイト <https://www.city.toyooka.lg.jp/bosai/bosai/bosaimap/index.html>)において田結庄町・松枝町・川原町は浸水の恐れのある区域とされている。